学校名：県立中原養護学校

令和４年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取　組　の　内　容		校　内　評　価		学校関係者評価 （２月 21 日実施）	総合評価（３月 17 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	児童・生徒が主体的に学び行動し、対話的に学び高めあう力を育み、地域の資源等を活用した活動を取り入れ、社会に開かれた教育課程を編成する。	①児童・生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善に取り組む。 ②地域資源を活用した授業の実践や近隣の学校等との交流及び共同学習を継続・発展させる。	①研究で整理した「授業改善のポイント」に基づき、教員一人 1 回研究授業を行い（略案可）、個々の授業を振り返る。 ②コロナ禍において工夫し、地域の資源を活用した授業に取り組んだり、新しい交流の仕方を検討し、実践したりする。	①学部で計画を立て、教員一人 1 回研究授業を行い、授業改善することができたか。また、学部等でそれらを共有することができたか。 ②地域の資源を活用した授業を実践することができたか。また、交流及び共同学習に取り組むことができたか。	①一人１回の研究授業の実施率は 63.7%。校内研究を通して、授業改善は進んできている。 ②コロナ禍の中で工夫して、地域の学校と作品交流や動画での交流を実施できた。地域にある施設、外部講師を活用しての授業など、様々なことに取り組むことができた。	①有効な研究授業になるように、教員が参観しやすいよう調整したり、結果を共有したりする方法の検討が必要である。 ②今後、感染予防対策を講じながらも、交流及び共同学習が充実できるように検討していく。	①授業改善の成果について、児童生徒からの視点での振り返りがあるとよい。 ②地域から提供された場所の清掃を行ったり、外部講師の活用をしたりすることで授業の充実に結び付いている。外部講師に授業の様子を返すことで良い形で次に繋がると考える。	①「研究授業を実施、授業改善ができたか」に「思う」36.4％、「ほぼそう思う」40.5%の教員が評価をしている。「主体的・対話的で深い学び」に対する理解が深まり、授業改善につながった。 ②感染状況を鑑みながら交流の実施や外部資源の活用ができた。より充実するように引き続き、検討する必要がある。	①校内研究のまとめとなる３年目は、研究授業を通して教員一人ひとりが研究成果を日々の授業に繋げることができるようにしていく。 ②関係部署や各学部で年間計画に沿って、実施方法について検討していく。
2	児童・生徒指導・支援	児童・生徒一人ひとりのニーズに応じた専門性の高い指導を行うと共に校内指導体制をさらに整備する。	①「学部コーディネーター」を活用しながら、学部・部門内での相談・支援体制を充実させる。 ②各学部で児童・生徒の実態把握をするための研修を行い、授業や指導に生かす。	①「学部コーディネーター」が核となり、専門性の向上を目指して学部のケース会や研修を行う。 ②各学部で専門職等と協力して研修を実施し、個別教育計画を作成したり、授業に活用したりする。	①学部のニーズに応じた研修会やケース会を実施することで専門性を向上することができたか。（教員アンケート「専門性が向上した」85%） ②児童生徒の実態を把握するための研修が実施できたか。また、研修内容や「アセスメント」等に基づき個別教育計画を作成、授業に活用することができたか。	①各学部で研修会やケース会を実施することができた。「専門性を向上させることができたか」について、90.1%が肯定的な意見であった。 ②「専門職と連携した研修会等を実施、その内容に基づき、個別教育計画を作成することができた」に 79.3%が肯定的な意見となった。	①より充実した研修にするため各学部のニーズを把握する必要がある。様々な勤務形態の中で、研修会の内容を共有する方法も検討する必要がある。 ②実態把握をするための研修を引き続き行い、教員の児童生徒を見立てる力の向上を図る。	①②専門職や経験豊富な方を講師として研修を実施している。地域で資源を活用していけるとよい。	①学部ごとに計画することで、ニーズに合った研修が実施できている。学部でケース会を開くことで、情報共有やより良い支援方法など検討することができた。方法等を検討し、さらに充実させる必要がある。 ②日頃から専門職と協働し、実態把握をしている。実態把握のための研修会を実施し、個別教育計画に反映、授業に結びつけることができた。	①各学部のニーズを把握し、ケース会等組織的に進めながら、職員の専門性の向上など人材育成も図っていく。 ②適切な実態把握とアセスメントの充実のため、今後も専門職との連携を図っていく。
3	進路指導・支援	個々のライフキャリア・ワークキャリアを見据えた進路指導・支援を行う	①全ての学部の教員が進路指導・支援に関する知識や実践力を向上させる。 ②児童生徒がキャリアパスポートを活用できるように全学部で取り組む。	①進路に関する研修を実施し、研修内容を基にキャリア教育を意識した指導に取り組む。 ②実際に児童生徒が活用する中で、各学部で課題を整理していく。	①進路に関する研修により知識を向上できたか。また、キャリア教育を意識した指導や進路学習ができたか。 ②キャリアパスポート活用に向けての取り組みが進んだか。（教員アンケート「取り組みが進んだ」80%）	①進路コーディネーターと連携して、進路に関する研修会を行うことができた。「得た知識を進路指導に生かすことができた」の評価は「思う」21.8%「ほぼそう思う」52.1%である。 ②全学部でキャリアパスポートの作成ができた。65.5％が「活用に向けて取り組みが進んだ」と評価した。	①自立と社会参加に向けた学習の充実は全学部に必要である。肯定的な評価ではあるが、「思う」の割合が少なく、さらなる充実が求められている。 ②14.3%の教員は、「活用が進んでいない」と評価しており、引き続き、キャリアパスポート活用に向けての検討が必要である。	①進路の情報が少なく、進路指導が分かりにくい。早い時期から児童生徒の適正など共有できるとよい（保護者アンケート） ②キャリアパスポートを学校としてどのように活用していくか、組織的に検討が必要である。	①教員の進路に関する知識を向上させることができた。得た知識を生かし、保護者への進路に関する的確な説明や進路指導のさらなる充実が必要である。 ②作成したキェリアパスポートの引継ぎと有効な活用方法の検討が必要である。	①全学部において、進路コーディネーターと各学部が連携して、より充実した進路に関する指導や保護者への情報提供ができるように取り組んでいく。 ②各学部でキャリアパスポートの活用方法について、引き続き、検討していく。

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取　組　の　内　容		校　内　評　価		学校関係者評価 （２月 21 日実施）	総合評価（３月 17 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
4	地域等との協働	地域のセンター的機能の充実を図るとともに、共生社会の実現のために地域と連携した活動の機会を設ける	①地域に中原養護学校の持つ資源を発信していく。 ②「地域に開かれた学校」を意識し、地域、保護者へ適時情報発信を行う。	①教材データベースや校内人材バンクを作成し、本校の持つ資源について情報を整理し、ＨＰ等を活用し情報を発信する。 ②学校への理解を促進するために、ＨＰの掲載や学校だより等を効果的に活用し、情報発信を行う。	①本校の持つ資源を校内で共有し、地域へ発信していくことができたか。 ②様々な情報が効果的に発信されたか。（保護者アンケートで肯定的意見 80%）	①学部により、達成状況が異なっている。授業で活用した教材等を集約ができた学部もあるが、進んでいない学部もある。 ②定期的に、各種通信の発行や「Twitter」の更新を行った。ＨＰの情報発信は 70.4%、各種通信や「Twitter」は 85.6％の保護者から肯定的な意見があった。	①具体的な進め方や担当が明確ではなかったため、32.2％が「進んでいない」と評価している。具体的な計画が必要である。 ②「Twitter」については、より充実を求める保護者意見もあり、アップする頻度や内容などを検討する必要がある。	①②イベントやバザー等の場を設けて、地域に向けて身近な場での情報発信がされると、より親近感が持てる。地域の協力により勤務し始めた２名の教員が学校についての発信ができるとよい。 ②「Twitter」での情報発信の充実を図ってほしい（保護者アンケート）。	①教材の集約等は進んだ学部もあるが、情報発信までは行うことができていない。 ②定期的に情報発信をすることができた。コロナ禍の中で学校の様子を知り得る手段の一つなので、より充実させる必要がある。	①次年度、教材データベース作成の期間、本校ＨＰのアップの時期など具体的なスケジュールと担当部署を明確に示す。 ②担当者等を明確にし、ＨＰの内容等を含め、計画的に情報発信ができるようにしていく。
5	学校管理 学校運営	保護者や地域から信頼・信用される安心安全な学校づくりを行う。	①児童・生徒が安心安全な学校生活を送ることができるように教育環境の整備に取り組む。 ②風通しのよい職場づくりを促進し、事故不祥事の防止に努める。	①感染予防対策、耐震化工事における環境の変化に伴う物品の整理、教室の配置や動線の工夫等を行う。 ②連絡・報告・相談等の意識を高め、「ヒヤリハット」等の報告等を全職員で共有し、事故・不祥事防止に向けた啓発を行う。	①感染予防対策を講じた教育活動を行うことができたか。また物品の整理等、安全な環境を保持することができたか。 ②事故・不祥事等を防ぐことができたか。	①校内ルールを基に感染予防対策を行い、授業や行事を行うことができた。校舎引越しに伴い、物品整理等を行い、教育環境の整備を行うことができた。 ②「ヒヤリハット」が起きたときに対応策を話し合い、同じような事故が起こらないように取り組むことができた。	①教育活動の充実を目指しながら、感染予防対策を検討する必要がある。耐震化工事のスケジュールに合わせて、その都度必要な内容を検討する。 ②引き続き「ヒヤリハット」報告を迅速に行うことで、職員の意識を高め、事故防止に繋げられるようにする。	①②事故不祥事防止は、学校は力を入れている。ミスを事故にしない取り組みが大切である。ヒヤリハットで教員が共有していく積み重ねが大事である。	①次年度も引き続く耐震化工事や工事終了後の変更に向けて、物品管理やスクールバス運行計画の見直しなど、安全な環境づくりを行う必要がある。 ②「ヒヤリハット」の内容を職員会議や打ち合わせで共有することで、教員の意識改革に繋がっている。引き続き、事故防止等に取り組む必要がある。	①関係部署を中心に計画、検討を進め、学部と連携しながら安全な環境整備に取り組んでいく。 ②事故防止のためのマニュアルやチェックリストの整理をより進める。職員の意識向上のために定期的に事故不祥事防止について啓発する。